

WHERE WORDS FAIL, MUSIC SPEAKS



Mail Interview with “Yucca”

Yucca プロフィール

2003年結成。ショートショートポップバンドとして都内を中心に活動し、2005年「laboratory products」でデビュー。また翌年にはセカンドアルバム「the orange sun in my room」をリリース。i am robot and proud, トクマルシューゴ、UHNELLYS、Ryo hamamoto など良質なアーティストと多く共演。2007年にドラムのしなだが背骨を骨折し、一時活動が中断される。また、本作までの6年間はメンバーの離脱、復活、新メンバー中條量行の加入があり、決して平坦ではなかったが、Yuccaという「船」に乗り、これからも音と共に旅を続けることを決意しレコーディングをスタート。録音・ミックスの全てをメンバーの榎本勇作が行い、ジャケットアートはファーストから変わらず絵本作家のさぶさちえが担当。今までと変わらぬ3分間のショートショートポップのほかにも、トーキングスタイル、フォークサウンドと幅を広げ進化したYuccaが詰まっている。 www.yucca-sounds.com

インタビュー：岩本 (ディスクユニオン営業部)

-----実に6年ぶりのアルバムになる訳ですが、率直なご感想を教えてください。

6年という前作出したときに生まれた子供が小学生になるほどに月日が経っていることに愕然とします。また、その間Yuccaのスタイルはほとんど変わっていないということにもびっくりです。

よくいうとブレてないということでしょうか。悪く言うと成長してない……! ?
ただ今回は時間はかかりましたが自分たちで納得のいくまでアルバム制作をやりきったので満足しています。



-----プロフィールにもあるように、この6年間の間に、メンバーの離脱、復活、新メンバーの加入など、他にも語り尽くせないであろう事柄が多数あったかと思いますが、今作の制作において、テーマとなった要素や事柄があれば教えてください

テーマというのは意識せず作ってました。何も考えてなかったというのが正直なところですが、でも今振り返るといろいろ思うところがあります。いまさらですがバンドって複数人で音楽を作るって言う不思議なことをやってるなと思います。

アートって普通一人が練り上げて作品を作っていくものだと思うんですけど、Yuccaだと5人のジャムセッションで曲を作っていくので魔法というか超常現象みたいだな。そのときの5人の意識が絡み合っているというスペシャルなものだなと感じました。なので、いいときも悪いときもそのときのスペシャルなものを作ってあげたいなと思いました。

-----今作はパッケージとしての発売よりも先に、HPからのフリーダウンロードというスタイルをとられていましたが、そこに込められた意図を教えてください。

最近CDが売れないとか、音楽を作るのにお金をかけられないとか、音楽ビジネス崩壊か! ?とかいろいろ話題に上がってますけども、実はそういう類の話とは関係なくてですね……。何か新しいモデルを提示しようとかそういう意識はまったくないんです。

フリーダウンロードの意図は、「できるだけ多くの人に届けたい。」というだけなんです。じゃーなんでCDを発売するのかと聞かれるんですが、CDを発売するのも同じ理由です。「フリーダウンロードです。聴いてください!」っていても「それってどうやるの?」っていう人が結構いるんですよね。

あと無料配信だっていってるのにパッケージで欲しいという人もいるし。ジャケット飾りたいとかCD棚に並べたいとか歌詞カードみたいとか。そういう人にも届けたいわけです。

<続く>

ネット見てると完全に配信に移行してるような錯覚に陥りますが、そんなこともないんだなと思いました。

自分もユニオン利用してるんで気持ちはわかりますね。ほんとはCDも無料で配りたいところなんですけどコストもかかるし貧乏バンドなんで、せめてお求めやすい価格に設定してます。

フリーダウンロードの反響は「太っ腹!」「もったいない!」「無鉄砲だ。」「がんばって作ったものはCDで買います。」とかが多かったですね。ぜんぜん知らない人がtwitterで広めてくれてありがたかったです。

-----ここ数年で音楽をリスナーに届けるという方式もWEBでの配信や、今回の様なフリーでというスタイルに傾倒しつつも、アーティストによってはCD、もしくはレコード、果てはカセットなどのフィジカルという質感を追い求める方もおり、文字通り多様化している過渡期、という認識を強く持たされています。音楽とより身近な距離感を持つアーティスト/リスナーとして、Yuccaの皆さんが考える音楽をデリバリーする理想型のようなものがあれば、それはどういったものだと思いますか？

CD (レコード、カセット) っていうのは今でもファンのアイテムとして必要です。配信のご時世だけどCDショップに行くとなんか無性に買いたくなりますからね。好きなアーティストのCDに限ってはいまだに購買意欲を刺激する魔力を持っていますね。デザインがおしゃれだとか手に取るとテンション上がるというようなものとして残っていくでしょう。

ファンじゃないけど聴いてみたいって人はデータでいいんじゃないでしょうか。その代わりデータで聴いた人をファンにさせないといけないわけですけども。

理想系は

- 全曲ストリーミングでの試聴：お試し
- 有料or無料ダウンロード：じっくり聴く
- CD販売 (ブックレットに全曲解説とかインタビューとか読み応えがある感じ) : ファンが買う

ですかね。

-----Yuccaの音楽を形容するうえで、ミニマルやという単語や、およそ3分間という限られた時間の中での音と音が重なり合っていく情景を思い浮かぶリスナーの方も多いかと思います。プロフィールにもショートショートポップバンド、と自らを形容されているように、そういった部分でバンドとしてのこだわり (譲れない部分) はあるのですか？

まずミニマルということに関しては意識的にやってるというよりはメンバーの性格が出ていると思います。ついそうなっちゃうという感じです。ミュージシャンって自我が強い傾向があると思うんですが、Yuccaのメンバーは以前のバンドでメインを張ったことがない人ばかりなので自分がグイグイいくのではなく他の人を引き立てるようなフレーズを弾くんですね。で、お互いがどうぞどうぞって譲り合ってどんどん音が少なくなっていくんです。そうすると誰かの隙間に誰かの音が入って結果的にいい感じのミニマルさが出るというなんとも結果オーライな感じでこれまでやってきました。

逆に3分間というのは意識してやってます。これは好みの問題なのですが。個人的には3分が一番集中して聴ける時間なんじゃないかと思います。アルバムだと40分です。もちろん長い曲でずっと聴いていたいっていういい曲はありますけども。

Yuccaを結成した当時、ポストロックとかプログレをやってるバンドが結構いて長い曲をドラマチックな展開でやってたんですね。それはすごくカッコいいなと思ってたんですけど、うちにはああいうことをやる演奏力もないし逆にポップで3分くらいのインストをたくさんやるってのはどうだろうと思ってそういう風になりました。今回のアルバムはインストは少ないですけどスタンスは当時と変わってないですね。インディーポップの3分にも満たない曲が20曲くらい入ってるアルバムが好きなんです。

-----3曲目のxylophonic streamなどをヘッドフォンで聴いていて強く思ったのですが、今作は楽器の一音一音が寄り添う様に鳴り合い、それぞれが「ここしかない!」という絶妙の位置に配置されているという印象を持ちました。バンドメンバーでありながら録音・ミックスを担当された榎本さんのエンジニア的視点からの今作のポイントとは？

エンジニア的視点というと大変恐縮するんですが、各パート重要なことやってるのでそれぞれ同じくらい聴こえるようにミックスしたいんですけどめっちゃ難しかったです。まず思ったのはベース (梅崎) がベースの役割をやってないんですね。ギターみたいなノイズを出したり、高い音ばかり弾くので他の楽器と音域かぶったりしてて低音スカスカみたいな。昔からYuccaは音スカスカだって結構いわれるんですよね。。。でも、ベースは重厚感を捨ててる代わりに面白いフレーズを弾いてるところがポイントの一つだと思います。みんな他の人の隙間に音を入れてこようとするのでYucca独特のアンサンブルになってると思います。その辺をぜひ聴いていただきたいです。 <続く>

-----インディーポップという一貫してぶれない軸の中で、クオリティの高い映像作品を提示するSLEEPERSによるPVも含めて、今作は既に3本のPVがアップされています。そういった視覚的な要素に対するYuccaの考え方をお聞かせください。

Yuccaはもともとインストを主にやってたバンドなので映像と音楽のコラボということには興味があります。Yuccaの曲を元に映像を作るというよりは映像があってYuccaの曲を当てはめるといほうが好きかもしれません。

「fun」という曲を作ったときには後半のスキヤットの部分は資生堂のCMにぴったりだとかいって勝手に盛り上がってました。あとは映画のワンシーンとかで使ってもらえたら最高ですね。

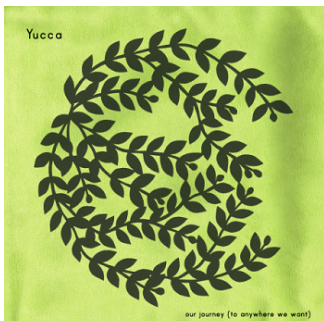
逆に今回「monet」という曲のミュージックビデオを自分で作って見たんですけど映像をつけただけでこんなに注目してもらえるのかとびっくりしました。

自分で作ったのはiPhoneで撮っただけのものなんですけど全然違いますね。アルバムでも地味な曲だったんですけど曲の価値がグンと上がりました。SLEEPERSさんに撮ってもらった「songs」なんてなおさらです。数年前ならともかく今はミュージックビデオがないと音を聴いてもらえなんだと痛感してます。

-----シティポップ的な歌心を提示する一方で、時にストイックなまでに"音楽家"としての意地にも近いプロGRESSIVE的な一面も感じさせる今作。それらをうまく内包して、最終的にこれぞYuccaという"暖かさ"や"しなやかさ"が味付けされた絶妙な作品という印象を感じるのですが、もしこの作品をレコード棚にしまう際にじっくり来るであろう場所があるとすれば、それはどの作品とどの作品の間だと思われませんか？

おもしろい質問ですね（笑）

Stereolabの「DOTS AND LOOPS」とSonic Youthの「Murray Street」の間に挟んでいただけたらと思います。音的にもこの2つの間におさまってると思うし3枚ともジャケットが緑だし。



-----HPに掲載されている数多の推薦コメントを読むだけでも、Yuccaの音楽に対する魅力は、ジャンルのなすりやトレンドといった一過性のものではないのだと強く思わされたのですが、現在のシーンにおいてyuccaの皆様がシンパシーを抱くアーティストをもしピックアップするとしたら？

ドラムの中條君が前に在籍してたYOMOYAというバンドにはシンパシーを感じてました。解散しちゃいましたが。同期のバンドだったので残念です。音楽的にそこまで似てるわけじゃないけど他人じゃない。はとこくらいですね。

あと、音楽性はぜんぜん違うけどuhnellysですね。10年以上前から知り合いなんですけど、お互い長くインディーでバンドを続けてて全然ブレてないというところに共感します。

-----Yuccaにとっての"ポップミュージック"とは？

一般的にはポピュラーミュージック=大衆音楽ということだと思のですが、個人的にはポップというのは誰が聴いても気持ちよい音のことだと思います。

「〇〇くーん、あーそーぼー」とか「じゃんけんぽんっ、あいこでしょっ」とかってずーっと昔から受け継がれてると思うんですけどもあれは言ってる（聴いてて）気持ちいいからずっとおんなじリズムで受け継がれてるんだと思うんですよ。

そういうような要素を含んだ楽曲、一回聴いただけで引っかかってもう一回聴きたくなるようなそういう曲が"ポップミュージック"なのかなと思ってます。

-----最後に、our journey(to anywhere we want)、というタイトルが付けられた今作ですが、2012年という今、また新たな船出を果たしたYuccaという船は一体どんな旅路を目指しているのでしょうか？

人生は旅だといいますが、バンドの場合5人の人生を内包したバンド生があります。5人もいるんだからしんどいこととかうまくいかないことはバンド生においてはデフォルトです。だけどそれぞれいい経験をしてバンド生を豊かなものにできればなと思います。そうするとまたいい音楽が作れると思うんですよ。

Yuccaを長く続けてきましたが、今からでも新しい気持ちで新しいことができると思います。今からでも行きたいところどこにでも旅に出れるんじゃないかと思います。<Fin>